

氏 名 井 上 洋 平  
学 位 の 種 類 博士（社会学）  
学位授与年月日 2010年3月31日  
学位論文の題名 幼児のみたて行動に対する理解の発達

### 【論文内容の要旨】

井上洋平氏の博士学位請求論文「幼児のみたて行動に対する理解の発達」は、幼児期の「みたて行動」を研究対象とした論文である。「みたて行動」は人間発達の研究分野の中で理論的研究においても実証的研究においても多くの研究の蓄積がある研究分野の一つである。本論文では先行研究を総括する中で「みたて行動」の研究には多くの研究があるが、「みたて行動の理解」の研究が少ないことを明らかにしている。本論文は、幼児のみたて行動をどのように理解するのかという研究課題に果敢に取り組んだ意欲的で貴重な研究である。以下、本論文の内容を概観する。

「みたて行動（対象物Aを対象物Bとして扱うこと）」の研究の概観から、井上氏は従来の研究の多くが、「みたて行動」をおこなっている人（多くは子ども、第1者とする）を対象にしている、人間発達の過程において「みたて行動」がどのように発生し、変容していくかを研究課題としたものであることを明らかにしている。井上氏は、しかし実際の保育場面や遊びの場面では、「みたて行動」は「みたて遊び」や「ふり遊び」として展開されることが多く、多くは2者以上が参加した集団活動の中でみられることから、集団活動の中でみられる「みたて行動」の研究が重要であることを指摘している。集団活動の中では、「みたて行動」をおこなっている子ども（この場合は、第1者）と「みたて行動」をおこなっている子ども（この場合は、第2者）の行動をみている子ども（第1者）がいるとし、後者の子ども（第1者）が相手の子ども（第2者）がおこなっている「みたて行動をどのように理解しているか」に関する研究も同時におこなわれるべきであるが、これを扱った研究が少ないことを指摘している。

本論文は、上記の井上氏の整理でも明らかのように従来の研究では蓄積の少ない「みたて行動の理解」に関する研究である。「みたて行動の理解」は2歳すぎから見られはじめ4歳ごろに安定してくるといわれているが、井上氏の論文はこのプロセスを理論的に整理し、その発達過程を解明しようとした意欲的な研究である。「みたて行動の理解」を分析する上で、井上氏は「ふりの文脈の成立（個人内プロセス）」と「ふりのシナリオを他者と共有（個人間プロセス）」の二つの軸をたててアプローチしている。そして仮説的に4つの型をとりだし、そこでみられる「みたて行動の理解」の特徴を分析している。すなわち4歳以降に見られる「共有型」（第1象限）と2歳すぎから4歳ごろまでの移行期にみられる3つの型すなわち「非共有型」（第2象限）、「未成立型」（第3象限）、「保留型」（第4象限）である。本論文の第2章「他者のみたて行動に対する反応とシンボル理解の関連」では「未成立型」の分析を、第3章「他者のみたて行動の理解と遂行要求に対する反応の関連」では「非共有型」の分析を、第4章「日常場面におけるみたて行動の展開」では「保留型」の分析を試みている。

本論文では、実験と観察によって幼児の「みたて行動の理解」の発達過程が分析され検討が加えられている。実験方法および観察方法は緻密で分析および結果の処理も適切になされている。そして、以下のよう貴重な成果がえられている。

第1は、2歳6か月から4歳11か月までの子どもを対象にした実験研究（第2章）では、3歳半ごろを境にして、「他者のみたて行動に対する反応」においてはふりの文脈を客体として捉えるようになること、

「シンボル理解」においては、「対応関係の理解」から「シンボル関係の理解」へという変化がすすむことが明らかにされたことである。3歳半ごろから「シンボル理解」の質が変わるといえる点が明らかにされたことによって、これまでの研究を一步進めることができたといえる。

第2は、2歳5か月から3歳5か月までの子どもを対象にした実験研究（第3章）から、「理解した他者のみたて行動であれば自らもその行動を遂行する」という、理解と遂行が常に一致した関係としてあるわけでないということが明らかにされたことである。理解していても自分ではそれをしないという選択をする場合がある。これは自-他間で個別の判断がありうることを示唆しているといえる。そして、ふりのシナリオが自他間で共有されていない場合には、自-他間の個別の判断が顕在化しやすいことも明らかにされている。「みたて行動」の遂行と理解の間にずれが存在することを明らかにしたことは、2歳児、3歳児の世界を理解する上で貴重な成果であるといえる。

第3は、2歳5か月から3歳4か月までの子どもを対象にした観察研究（第4章）から、子どもは「みたて行動」を介して多様な経験をしていることが明らかになったことである。「みたて行動の理解」を扱った従来の研究（麻生、1996；Leslie、1987；Perner、1991/2006；Piaget、1945/1962）では、ある時点（瞬間）での対象（シンボル関係）への理解にのみ注目してきたため、時間の連続性や状況の多様を十分考慮して研究がなされてこなかった。他方で、「みたて行動」がいかに維持されたり、他者との間で調整されたりするのかというコミュニケーションの側面に注目した研究（Giffin、1984）では、時間の連続性は考慮されているものの、「みたて行動」を通じて経験する内容については十分な分析がおこなわれてこなかった。こうした先行研究における未検討の諸課題への手がかりとなる成果がえられたことは、本論文の大きいに評価できる点である。

本論文では、今後の残された検討課題として以下の点が整理されているが、いずれも今後の研究の広がり可能性を示唆する内容となっている。

第1は、本論文では、「シンボル理解」と「ふりの意識」の関連を指摘し、観察研究（第4章）を通じて両者の関連性を検討することはできたが、「ふりの意識の自覚化」の問題を十分に検討することができなかった点である。「ふりの意識の自覚化」をどのように研究していくかについては、実験法または観察法のそれぞれの特徴を生かした研究方法についてのさらなる吟味が必要となるが、自-他関係を介して個人内プロセスを外在化させる実験パラダイムが作り出せれば「ふりの意識の自覚化」の実証的研究の可能性が生まれてくるといえる。

第2は、みたて行動の対象が対象物である場合を想定して研究はすすめられたが、観察例から、みたて行動の対象が他ならぬ自分自身（第1者）となる場合があることが明らかにされた（観察17）。これによって対象が自分自身（第1者）となる場合にも「シンボル理解」と「ふりの意識」との関連からとらえていく研究の展開が必要となる。「主体としての自己」の問題をシンボル理解と絡めて検討することが今後の検討課題の一つとなってきている。

上記の検討課題に加えて、井上氏は本論文の実験研究および観察研究からえられた知見から「保育・療育や教育への示唆」について論究して次のように述べている。「研究を通じて、子どもが経験している世界が子どもの目線で多少なりとも明らかになったことは、保育・療育や教育においてこれまでの内容を見つめ直す契機にもなると考えられる」（本文、pp.78-80）。このように基礎的で緻密な実験研究や観察研究をすすめつつも実践活動や臨床活動への応用可能性を視野に入れて研究を構想する姿勢は貴重である。実践・臨床活動と基礎的・理論的研究を相互貫流させる問題意識を持ち続け、本論文での研究成果のさらな

る発展が期待できる。

論文の構成は以下のようになっている。

## 1. 本論文の構成

序 論 遊びとしてみたて行動を研究する意義

第1章 みたて行動の発達をめぐる研究の課題

第1節 ふり行動の発生に至るまでの過程

第2節 みたて行動を扱った理論的研究の概観

第3節 みたて行動を扱った実証的研究の概観

第4節 みたて行動に対する理解を扱う研究の課題

第2章 他者のみたて行動に対する反応とシンボル理解の関連

第1節 問題と目的

第2節 方法

第3節 結果

第4節 考察

第3章 他者のみたて行動の理解と遂行要求に対する反応の関連

第1節 問題と目的

第2節 方法

第3節 結果

第4節 考察

第4章 日常場面におけるみたて行動の展開

第1節 問題と目的

第2節 方法

第3節 結果

第4節 考察

第5章 総合考察

第1節 本研究の成果と課題

第2節 保育・療育や教育への示唆

引用文献

## 2. 本論文各章の概要

第1章では、先行研究の到達点と課題が整理されている。本論文の目的に対して以下の3点を考慮したアプローチの必要性が提起されている。第1は、子どもが経験する多様な状況を捨象せず検討対象に含めること、第2は、自他の同型性だけでなく自他の個性を考慮すること、第3は、シンボル理解をはじめとする個別の心理機能に関する知見から子どもがみたて行動を介して経験する内容を考察することである。こうした点に関する議論が第1章で展開され、あわせて第2章、第3章および第4章で実験研究および観察研究（実証的研究）を通じて取り組むべき具体的な検討課題についても整理されている。

第2章では、2歳6か月から4歳11か月までの幼児を対象に、前置きのない他者のみたて行動に対する

反応とシンボル理解および両者の関連について実験研究によって検討された。そして、みたて行動に対する反応とシンボル理解のいずれにおいても3歳半ばごろを境に変化が認められた。これら結果をふまえて、前置きのない他者のみたて行動に対する幼児の理解の発達について検討が加えられている。

第3章では、2歳5か月から3歳5か月までの幼児を対象に、自-他間でふりのシナリオが共有されていない場面における他者のみたて行動に対する理解と遂行要求に対する反応の関連が実験研究によって検討されている。実験の結果、実験者のみたて行動におけるシンボル理解を確かめる質問には回答するものの、そのみたて行動を自ら遂行するよう要求されると拒否をするということが一定数の被験児に認められた。この点に関しては、自-他の個別性の観点から、「理解すれども自らは行わない」という理解と遂行の関係として考察が加えられている。

第4章では、2歳5か月から3歳4か月までの幼児を対象に、日常場面におけるみたて行動の展開が観察研究によって検討されている。その結果、子どもが多様な状況の中でみたて行動を経験しているという事例が明らかになった。そして、第2章や第3章でも検討された個別の心理機能に関する実験研究の知見とも関連させて、各観察事例にみられる幼児のふり行動の理解への考察が加えられている。

第5章では、「みたて行動に対する理解」について包括的に全体的検討が試みられている。本論文における研究成果と今後の課題が整理され、さらに、えられた知見のもとに保育や教育への示唆が議論されている。

#### 【論文審査の結果の要旨】

井上洋平氏の論文は、以下の点で評価できる。

第1は、人間発達の研究分野で多くの研究者が研究対象としてきた「みたて行動」を実践的、臨床的視点から整理し直し、これまでの「みたて行動」の多くの研究は発生的視点からのもので、幼児のみたて遊びの中でよく見られる「みたて行動の理解」に関する研究が少ないことを明らかにした点である。実践的、臨床的視点から先行研究を緻密に読み込み、問題の所在を明確にしたことによって、この分野に新しい論点を持ち込むことに成功している。この点で挑戦的で、論争的な内容をはらんだ魅力的な論文となっている。

第2は、上記の視点から研究課題を設定し、2つの実験研究および1つの観察研究によって検証することに成功している点である。実験計画および観察計画は組織的で緻密に準備されて実施されている。また、えられたデータの処理も適切におこなわれている。えられた結果から適切かつ無理のない論証によって研究課題の検証へとアプローチする能力と態度は、研究者として十分な基礎的資質を備えていると評価できる。

第3は、本論文が実践や臨床への応用において大きな貢献を果たす可能性があるということである。理論と実践との相互環流は人間発達の研究においては常に求められるところであるが、本論文では実践や臨床への応用の可能性を示唆する多くの知見が見い出されており、この点で刺激的で、魅力的な論文となっている。

第4は、「みたて行動」の発達過程をモデル化しているが、これによって従来研究者によって概念や論点がずれたり、誤解されたりしてきた諸問題を理解しやすく位置づけるのに成功している点である。この作業によって「ふり行動」のこれからの研究の位置づけが明瞭になっていくであろう。

審査公聴会（2010年6月30日実施）では、上記の積極的評価に加えて、今後の検討課題や本論文の制約

性についても率直に議論された。

第1は、提案された「みたて行動」における子どもが置かれる4つの状況に関するモデルは、先行研究および本論文の3つの研究を位置づけるという点では成功しているが、理論と実践および臨床をつなぐモデルとしては、本モデルの各次元の名称をふくめてその妥当性については今後いっそうの検証が求められるという点である。その一つとして、観察例の解釈にあたっては、4つのモデルからの解釈の他に、他の視点からの解釈可能性も残されていることが指摘された。モデルを提示して研究の方向性を示唆するという積極性は評価できるが、その妥当性について検証をさらにすすめてほしいと指摘された。この点は本人も自覚しており指摘については同意した。

第2は、研究課題の整理は適切におこなわれているが、研究方法として「なぜそのアプローチ方法をとるのか」「それは他の方法論よりどの点で優れているのか」など、本論文で用いられた研究方法論上の説明が十分に論述されておらず、「みたて行動」研究の今後のあり方とも相まって、さらなる研究方法論上の検討が必要であると指摘された。より自然な場面での観察を重視することの重要性とともに、仮説検証を無理なくおこなうための実験法や観察法の開発が期待される。この点については、本人から今後の検討課題としたいとの表明がなされた。

第3は、「みたて遊び」の解釈が大人の側からの解釈だけになっていないかどうかについてである。「みたて行動」はシンボル形成や表象など言語学や哲学の分野で研究されてきた歴史があるが、近年では人間発達研究の重点分野として発生的視点から研究されてきている。「みたて行動の理解」に関する研究においても子どもの側からの視点を重視して研究を進めていく必要性について指摘された。本論文でも対象児は2歳から4歳であり自分の行動を内省的に説明するのには一定の困難がある。「みたて行動の理解」の発生的研究をどのようにすすめていくかについては、研究方法の開発も含めて今後の検討課題としていきたいとの表明がなされた。

審査委員一同は、上記の公聴会の質疑応答をふまえ、審査委員で協議した結果、一致して本論文が博士学位（甲号）を授与されるに十分な水準にあると判断した。

### 【試験または学力確認の結果の要旨】

審査委員会は、井上洋平氏の博士（甲号）の学位請求論文を精読し、さらに審査公聴会（2010年6月30日実施）での質疑応答をふまえ、学位規程第18条第1項にもとづいて、本論文が全員一致で「博士（社会学 立命館大学）」を授与されるに十分な水準にあると判断するとともに、井上氏が博士課程在学中におこなった学会報告（国内学会15回うち筆頭者発表7回・非筆頭者発表8回、国際学会1回うち筆頭者発表1回、国際セミナー3回うち筆頭者発表3回）および公刊論文（14本、うち単著論文7本・査読付5本・査読なし2本、うち共著論文7本・査読付5本・査読なし2本）、翻訳書1本（共訳）の内容を総合的に判断し、井上氏が十分な専門的知識と豊かな学識を有することを確認した。

審査委員	（主査）	荒木 穂積	立命館大学産業社会学部教授
	（副査）	竹内 謙彰	立命館大学産業社会学部教授
	（副査）	赤井 正二	立命館大学産業社会学部教授